

よしだまさお 吉田昌郎さんをしのぶ

追悼



高木 直行

元東電社員、
東京都市大学工学部
原子力安全工学科
教授

七月九日死去

58歳



東京電力株式会社
元福島第一原子力発電所 所長
(写真提供：東京電力)

「グループ全員の顔写真の入った座席表をつくってくれ」。二〇〇七年四月、東電本店の五階に新設された原子力設備管理部の部長に就いた吉田さんは、着任早々こんな指示を出した。設備管理部は、データ改ざん問題を受け組織改革の一環として新設された部だ。所掌範囲は、設備の計画・改良、炉安全、燃料、規格、電気機械、建築土木等と、大学工学部でいえば

持ち前の人柄が所員鼓舞して危機回避

学科の大半をカバーする広範さで、仕切りのない長細い大部屋に一〇〇名以上の社員がいた。まずは部下全員の名前と顔を把握することから始める。吉田さんらしいやり方だ。

着任間もない同年七月、七基の原発を抱える柏崎刈羽原発が新潟県中越沖地震に見舞われ、本店で設備を統括する設備管理部もてんでこ舞いとなった。そんな中でも吉田さんは誰彼分け隔てなく気さくに声をかけてきた。各グループの机の島が一五

ほどはあったろうか。担当者の名前と居場所を頭に入れた吉田さんは、島の間の狭い通路をぬって唐突に担当者の席に現れ、業務に関係しているような、していないような話をして去っていくのである。その口調は紳士的というよりは、やはり親分の

ように人情味にあふれ、いつの間にか部の結束も強まっていた。吉田さんが持つ独特な魅力を表現するのは難しいの

だが、「吉田さんに頼まれたら、どんなに手一杯の業務を抱えていようが、何とかしてみようか」と、誰をもそんな気にさせる不思議な力があつた。四万人の社員を抱える東電内で、頭脳明晰で技術力や管理能力に長けた優秀な人は多くみだが、「本店部長に就く人は、さらにそこから抜き選んで、人間的に広く深い魅力を持つているもんなんだなあ」と感じたのを記憶している。

遡ると吉田さんは一九九五年七月から四年間、電事連原子力部へ出向し高速増殖炉（FBR）開発業務にも携わり、同年末に起きたもんじゅ事故対応にあたっている。二〇〇七年には上述の中越沖地震、そして二〇一一年の東日本大震災だ。東電が、そして日本の原子力界が危機に陥っている時、偶然にも直結する部署に吉田さんがいて危機回避に努めてきた。福島事故は最大であるが、最初ではない。多くの社員が吉田さんへ寄せる信頼はこうして時間をかけて醸成されたものに違いない。それが、電源喪失した福島第一原子力発電所の現場をまとめ、事故のさらなる拡大を食い止める力となった。

事故直後、巷で所員の全員撤退がさやかれたが、私は「そんなことは決してありえない、誤報だ」と確信していた。東電の誰に尋ねたわけではない。吉田さんを、そして多くの社員の顔を知っている私にとって、それは至極明白だった。

二〇〇八年三月に私が東電を退職する際、吉田さんは少人数での壮行会を開いてくれた。当時は原子力ルネッサンスで業界に勢いが戻っていた時期でもあり、「これから担う若者の育成をしつかり頼むよ」と激励された。来春、東電は事故後見合わせていた新規社員採用を再開する。都市大からも数名が入社する予定だ。原子力を志す学生の間では、実のところ今でも東電の人氣は高い。学部の授業で「東電を希望する人」と、元社員として控えめに聞えば、半数近くが手を挙げたのには驚いた。さらに卒研生や院生は、環境放射能挙動や溶融燃料デブリ取り出し技術など、事故収束に関する研究テーマを希望する者が少なくない。何ら責任のない彼らが事故収束関連研究に積極的なのは、暗闇の中にひとすじの光をみる思いである。

吉田さん、人は育っています。後のことは我々に任せて、どうぞ安らかに眠りください。